くすり博物館だより

VOL. 45
平成13年(2001)4月

NAITO MUSEUM OF PHARMACEUTICAL SCIENCE AND INDUSTRY

内藤記念くすり博物館
〒501-6195 岐阜県羽島郡川島町竹早町1
Tel:058689-2101 Fax:058689-2197
http://www.eisai.co.jp/museum/

くすり博物館開館30周年を迎えて

館長 三宅康夫

内藤記念くすり博物館は、1971（昭和46）年にエーザイ株式会社の創業者であり、内藤記念科学振興財団の設立者であった内藤豊次によって開設され、本年で開館30周年を迎えました。これもひとえにご支援・ご指導をいただきました皆様、ご来館いただきました皆様のおかげと心より感謝申し上げます。

くすり博物館は、わが国の薬学・薬業の発展を伝える貴重な史資料の散逸を防ぐとともに、収集・保存を行い、調査研究・展示・普及活動を実施して、くすりの歴史・文化や、健康科学について紹介する活動を続けてきました。開館から十数年は資料を集めることに文字通り奔走しましたが、多くの皆様よりご支援いただき、資料数・蔵書数はそれぞれ5万点に達しました。附属薬用植物園で育成されている薬用・有用植物も600種類あり、見学される方にご好評を得ています。来館者数もここ数年は年間5万人前後を維持し、本年秋には開館以来100万人目の来館者を迎えることができそうです。

博物館・薬用植物園の活動についても医薬の専門家だけではなく、一般の方にも興味を持っていただけるようにと常に心がけてきました。博物館活動の柱ともいうべき企画展では、収集した資料を公開・解説し、あわせて図録を刊行してきました。そして、医薬史上の有名無名の先人たちが残してくれた“遺産”がどんなものであったかを次世代へ伝えたいと願っています。

また最近は、博物館が生涯学習の場として果たす役割も大きくなり、当館でも薬草説明会、薬草栽培教室と薬草友の会、夏休み親子教室、植物画講座などを開催しています。これらの催しに参加される方も年々増えてきました。特に30周年を迎えた本年は、記念特別展として「はやり病の文化誌―麻疹・疱瘡・コレラ―」を開催し、それにちなんで収蔵資料集④『はやり病の錦絵』を出版しました。記念出版物としては、『大同薬室文庫蔵書目録 附 館蔵 和漢古典籍目録』と『薬物名出典総索引～江戸・明治初期の薬物検索のための～』を刊行し、都道府県立や医薬系大学の図書館等へ寄贈しました。薬用植物園では5月下旬に楽しい催事を予定しています。皆様におかれましては、ぜひご見学・ご参加いただきますよう、また出版物をご活用くださいますようご案内申し上げます。いよいよ21世紀が始まりましたが、これからも多くの皆様にご満足いただけるような魅力ある活動を続けていきたいと思っています。今後もくすり博物館へのご協力・ご支援をお願い申し上げます。

▲ 館長 三宅康夫

▲ 内藤記念くすり博物館と薬用植物園

30周年記念

特別展

「はやり病の文化誌」

—麻疹・疱瘡・コレラ—

▼麻疹（はしか）送出しの図
芳藤画　文久2年（1862）＜40×25＞
単に撃退するのではなく、麻疹の神にお供えをして友好的に退散してもらうのは、日本の伝統的な病気送りの方法である。

▼麻疹退治
芳藤画　文久2年（1862）＜37×25＞
麻疹に被害を受けた職業が擬人化されて、麻疹の神をこらしめている図。

▶茶毘室（やきば）混雑の図
仮名垣魯文編『頓病流行記』口絵
安政5年（1858）＜30×40＞
火葬場に次々とコレラで亡くなった人の遺体が運び込まれている様子が描かれている。

▶虎列刺（コレラ）退治・虎列刺の奇薬　木村竹堂
明治19年（1886）＜31×43＞
コレラは「虎狼狸（ころり）」とも呼ばれたので、虎・狼・狸が合体した怪獣に見立てて恐怖を表現している。

▼当世雑語麻疹合戦記
江戸時代　＜36×73＞
麻疹の流行で暇になった職業が擬人化され、麻疹と戦っている図。当時、もうかったと考えられていた医者や薬屋は麻疹の味方をしており、皮肉が効いている。

病と人々との戦い

医薬が十分行き渡らなかった昔、人々が最も恐れたのは伝染病でした。伝染病は、短時間で多くの人が感染する病気で、江戸時代には疾疫、疾気（えやみ、えのやまい）とも呼ばれました。

伝染病のうち、急性のものには天然痘（疱瘡）や麻疹（はしか）、腸チフス、赤痢などがありました。また、慢性のものではハンセン病、結核、梅毒があげられます。中世以降はコレラ、インフルエンザなどが流行しました。

現在でこそ、伝染病は「微生物やウイルスなどによって人から人へ伝染して起こる感染症」と定義され、教育によって理解も深まっています。しかし古代から、伝染病は疫鬼（えっき）や疫神（えきしん）によるもの、あるいは悪霊や怨霊のたたりと信じられていました。中世以降も病気の原因については迷信的な説明が信じられており、隔離をするなどの病気を防ぐ方法はまだ不十分なままでした。

また、治療も根本的なものではなく対症療法に過ぎなかったため、大量の死者を出しました。微小な生物が病気の原因であることは、19世紀後半、フランスのパストゥールやドイツのコッホらの発見まで待たねばなりませんでした。彼らによって多くの病原菌が発見され、ついで病気の予防や治療方法として免疫療法が開発されるに至って、長い間人類を苦しめてきた伝染病撲滅への道がやっと開かれたのでした。

化学療法剤の登場

20世紀になると化学療法剤が開発されました。化学療法剤は合成した化学物質で病原菌を殺す薬で、当時「魔法の弾丸」と呼ばれました。この創製に最初に取り組んだのは、ドイツのエールリッヒと、彼の弟子の秦（はた）佐八郎でした。1910年に化学療法剤の第一号として、サルバルサンが梅毒に有効であることを発表しました。その後、1935年ドーマクがプロントジルを開発し、連鎖球菌による感染症の治療に成功しました。続いてサルファ剤が登場するなど、化学療法剤は細菌感染症の予防、治療にすばらしい威力を発揮し、医療の進歩に貢献しました。

▲ノーベル医学賞受賞の切手
左右がエールリッヒ、中央が秦佐八郎

▲赤色プロントジル
1935年、ドイツのドーマクが染料の一種であるプロントジルに化膿を抑える作用があることを発見した。

◀ノーベル医学賞受賞者の切手
左がコッホ、中央がフレミング

抗生物質の発見

細菌の抽出物が他の細菌を殺すということは1928年に、イギリスのフレミングによって発見されました。その物質はペニシリンで、細菌性疾患に驚異的な威力を示しました。その後フロリー、チェインらが研究を行って、1943年にはペニシリンを医薬品として開発しました。細菌などの微生物から作る薬、「抗生物質」の研究はこれ以降急速に進展し、結核に有効なストレプトマイシンを始め多くの抗生物質が誕生し、今まで治療が困難だった病気のいくつかが治るようになりました。

▶碧素（へきそ）とアオカビ（模型）
アオカビによって作られた抗生物質ペニシリンは、他の病原菌の繁殖を防ぐ力を持っていた。日本では第二次世界大戦末期に陸軍と学者が共同でペニシリンを開発し、日本的な名前として「碧素」と名づけられた。

医薬と健康 ～現在とこれから～

20世紀には、医学が進歩し有効な薬も開発され、栄養や衛生状態の改善の助けもあって、代表的な伝染病である天然痘が撲滅されたほか、いくつかの感染症は減少しました。その一方で、多種類の抗生物質が頻繁に使用されるようになると、その薬が効かない耐性菌が出現したり、人間の身体の免疫力が低下するなど、新たな問題も生じるようになりました。しかし、薬は今や私たちの生活になくてはならないものであり、現在もなお、新しい薬の研究・開発がなされ、たえまない努力が続けられています。

今世紀には、超高齢化社会が到来するといわれ、疾病を持つ人や障害のある人、乳幼児・高齢者への支援は今まで以上に必要とされてきます。また、病気と"うまくつきあっていく"ためにも、現在の健康を維持するためにも、「自分の健康は自分で守る」という意識をより一層強く持つことが必要です。更に、プライマリー・ヘルス・ケア（予防医学）という総合的観点から、単に医薬に関係のある分野のみ充実させるのではなく、生活環境や社会制度も含めて疾病の治療を考えていかなければならない時代ということができるでしょう。

＊

今回特別展で紹介している江戸時代から明治時代の「はやり病」の錦絵やちらしの中には、病を撃退する趣旨のものもあれば、養生の大切さを説いたものも多くあります。養生というのは、今日では病後の手当てや保養の意味で使われますが、昔は、日頃からの生活態度や心得など、もっと広く深い意味を持っていたといえるでしょう。当時はまだ健康という言葉はありませんでしたが、当時の人々がどれほど健康に注意を払い、どのように養生しつつ生活を送っていたか…ということを考える時、「はやり病」の錦絵やちらしは健康や養生について、ともすれば私たちが忘れがちなことを伝えてくれるのではないでしょうか？

今回の展示資料から、人々がいかに病気と向き合ってきたかを今一度見ていただきたいと思います。

特別展担当 伊藤恭子

＜　＞内は資料のサイズ。単位はcm。

収蔵資料集④『はやり病の錦絵』

『くすり看板』『くすり広告』『くすり入れ』に続いて第4集が刊行されました。30周年記念特別展に沿って、疱瘡（天然痘）・麻疹（はしか）・コレラなど伝染病に関する錦絵を中心に図版を111点収載いたしました。今回よりＡ４サイズとなり、図版も大変見やすくなりましたので、ぜひお求めください。（164ページ／１冊2,000円）

『大同薬室文庫蔵書目録 附 館蔵 和漢古典籍目録』

当博物館図書室収蔵の50,000点の図書のうち、23,000点ある和漢書の目録を作成しました。内藤記念くすり博物館編／A4判512ページ

『薬物名出典総索引～江戸・明治初期の薬物検索のための～』

江戸～明治時代に出版された122種類の書籍の中に記載されている薬物名の出展索引です。和漢の薬物名については既に故・清水藤太郎先生が『和漢薬索引』を出版されていましたが、今回は更に調査する書籍を増やし、和漢薬だけでなく、洋薬の名前も拾い上げました。青木允夫・野尻佳与子編／A4判1108ページ

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

◆当博物館や全国の医薬系大学の図書館、県立図書館などで閲覧できますので、ぜひご利用ください。なお、ご購入希望の方はお申し込みください。

30周年記念イベントのお知らせ

5月26・27日（土・日）に、30周年を記念して薬草園フェスタを開催します。次のような楽しいイベントが催されますので、皆様ふるってご参加ください。原則無料です（一部有料です）。

ハーブ・ハウス
おいしい手作りハーブクッキーやハーブティーが楽しめます。

薬草園ガイドツアー
ボランティアが薬草園の植物を紹介します。薬草やハーブについて知りたい方におすすめです。

うこん・ハウス
ウコンとその仲間の薬草の利用方法を紹介します。カレーや薬膳うどんもぜひどうぞ！

どんぐり工房
どんぐりに絵を描いてマスコットを作りましょう。木にとまらせても素敵！薬草の葉のたたき染めにもチャレンジ！

TOPICS

◆『薬草に親しむためのハンドブック3』ができあがりました

このハンドブックは、くすり博物館の薬草園や岐阜近郊で見られる薬草や有用な植物を、絵と簡単な解説で紹介するもので、タイトル通り薬草に親しむために作られました。1990年に第1集が、1998年には第2集が刊行され、この2月には第3集の刊行となりました。今回は第2集に続き、植物画講座の受講生が原画を制作しました。前回の倍近くの92名の方が、1年半にわたって熱心に作画しました。解説は、当博物館のアドバイザー・逸見（へんみ）誠三郎が薬効や有用性を中心に執筆しました。逸見は当博物館の植物画講座で13年にわたって講師を務めており、講座受講生に生薬学の知識と植物画の技術の両面からアドバイスをしてきました。

なお、この原画は2月27日から3月24日まで、当博物館の企画展示室にて展示されました。ハンドブックは各600円で当博物館で販売しております。

◆館長が『日本製剤技術史—20世紀の製剤技術—』を出版しました

館長の三宅康夫が、（株）じほうより『日本製剤技術史—20世紀の製剤技術—』を出版しました。単なる製剤技術史書ではなく、わが国の経済発展や時代の変遷といったバックグラウンドをふまえて、薬をめぐる歴史的トピックスを取り上げた現代史書ということができます。書店でも購入できますが、当博物館でも取り扱っております。（送料はご負担ください。）（A5サイズ　180ページ　本体価格2,600円　税込価格2,730円／ISBN4-8407-2828-3　C3047）

◆◆資料・図書ご提供者ご芳名◆◆

井野壽・花王（株）・片桐平智・北村二朗・河野亨・後藤勝実・佐藤喜久子・清水良夫
製剤機械技術研究会・武田科学振興財団・立岩医院・内藤祐次・長崎大学薬学部・長野仁
中村陽一・西巻明彦・日本東洋医学会・長谷川弥人・三菱東京製薬（株）・森納・山崎光夫

（五十音順／敬称略）　～ありがとうございました～

くすり博物館のあゆみ

1971	開設
1973	『ペニシリン物語』展
1978	「くすり博物館だより」創刊 『アメリカに見る医学の歴史』展…アメリカのスミソニアン研究所（国立歴史技術博物館）が初めて海外に貸し出した
1979	『人類の恩人ルイ・パストゥール』各地で巡回展示 来館者が2万人を越える
1980	『緒方洪庵と適塾』巡回展示
1981	開館10周年記念で映画「くすりと日本人」を制作
1983	『天然痘ゼロへの道』巡回展示…海外より貴重な資料を借用し、高い評価を得る
1986	新館が完成し、展示室が本館から移動
1988	この年より、年に1～2回の企画展示と植物画講座を開始
1990	薬木園の完成
1991	開館20周年記念特別展『目で見るくすりのあゆみ』開催…英国やスイスより貴重な資料を借用して展示
1992	国立科学博物館・内藤記念科学振興財団共催の特別展『目で見るくすりのあゆみ』を東京の国立科学博物館にて開催
1995	大同薬室文庫をご寄贈いただく
2001	30周年を迎える

『くすり博物館だより』が変身

30周年を記念して、誌面をより見やすいようにサイズを大きくしました。これからも『くすり博物館だより』はいろいろな情報をお伝えしていきたいと思います。ご質問やご意見などありましたら、お寄せください。

内藤記念くすり博物館

開館／9：00～16：00
休館／月曜日
　　年末年始（12/28～1/8）

館長　三宅康夫
学芸員　稲垣裕美（編集担当）
学芸員・司書
野尻佳与子　伊藤恭子
庶務　森田麻起子
小島敦子（見学受付）
図書整理　林　知子
薬用植物園
主任・学芸員　白井英夫
栽培管理　栗本省三　苅谷辰行
顧問　青木允夫
アドバイザー　逸見誠三郎